戦争体験記

吉川正則（習志野台・83歳）

私は深川白河町三丁目に住し、同四丁目に陸軍階行社第十二縫製工場を置き猿江町に分工場と總工員百三十八名にて尉官以上の軍服を製作しており昭和二十年二月二十五日に三十センチ以上の大雪の中空襲があり神田の一部と深川白河町一丁目二丁目とが焼土と成りました。

空襲は毎日何度となく日ごとに数を増して来て機銃の玉が道路に火花がちり身の毛がよだつ様な気がします。いよいよ空襲が烈しく成って来ましたが、私には仕事の責任がありますので、逃げ出す事も出来ず、いよいよ三月十日午前0時頃より大空襲がはじまりました。風は十五米以上の強風に火は各所に火の手があがりたちまち火の海と化し天をもこがすかと思われるいきおいです。にげまどう人。体に火がついて道ばたにたおれる人、乳児を下におおいかぶさって死んで居る人。地ごくの絵巻を見る様なすさまじさの思いです。私も逃げ場が無く扇橋の上から川の中に飛び込んで、木場の丸太が浮いている。それにかじり付きました。其の時は先客が大勢おりました。火は川の面に近くなめて来ます。焼けている家の雨戸や色々な物がまっかな火の玉が飛ん来る川の中に居る人も皆火傷やけがをして皆な生ようとしているのです。

だが水の中に体をつけてゐるのだから寒さに身も心も凍りそうになると眠く成って来る其の眠さは何もいう事の出来ない眠さなのです。眠れば其のまま水中に沈み死んでしまうので大声をあげてどなりますが眠さの方が強いとみえて又一人と段々減り三、四十人いたかと思った人が夜明けの頃には十二、三人になってしまったのです。川からはい上がって体中の水びたしの体に心無く吹き付ける強風にたまらず焼けあとの火のかたまりに飛んで行き暖を取ろうと思っても火傷や目のいたさに火のそばには近寄れませんでした。近くにコンクリートのガレージがあったので風をよける事が出来た。其の時初めて生残った事がわかった様な気がしました。するとこんどは家族の事が気に成って来ました。其の時「吉川」とよぶ声にふり向くと「おまえの親父がたすかった。」と知らせてくれました。又、其の後で「おっかあも生きていたぞ。」と知らせてくれた。友達の友情を有難く思いました。少しして妻が乳児を背に軍の外套を頭からかぶってやって来ました。聞けば浅沼稲次郎君が子供に火傷をさせるなといって掛けてくれたとの事、友情と浅沼君の人柄に尊敬しました。いよいよ引き上げなければと北区に工場移転の為に買置いた浴場があるのでそこに行く事にして町内人達の内で生き残った人達、十四、五人と共に上野から山づたいに北区西ケ原の浴場迄、目くら行列の様なかっこうで十日の昼すぎにようやくたどり付き、おち着く事が出来ました。

三月十三日我家の焼けあとに来て見れば倉庫の焼け跡に何人かの女達が

軍服地の反物で積んであった、焼けた廻りの中に一尺か二尺位に残った生地を我先にとひろい集めていました。私がその近く迄行った時に、私の姿を見てにげる気に成って居るので「遠慮なく持って行きなさい。」と言いました。ほっと安心したかの様に又かき廻し始めました。

町内の役員や警察消防の方と大富橋のたもとに有る末廣味噌の地下室がひなん所に成って居たので其の中に百人以上の男女や子供達が逃げ場も無く其の中で全員焼死してしまったのです。十三日にはまだ火がいぶって居るので一階のゆかを打ちこわし消防が小名木川の水を放水してしまったので人間の佃煮の様に成り、焼トタンでモッコを作り外に出すのですが地下に入って二十分もしたら頭がいたく、気持が悪くとても長居は出きません。地下室よりモッコに死体をのせて地上に出てトラックにのせて運びました。

今でも、大富橋のたもとに大勢の人の、のこりのこまかい骨を集めてうめて其の上に碑を立てて有ります。

私は大震災、戦災共に一番悪い地に居ながら今日迄生残り神佛の御加護と心から喜んでおります。